



パレスチナ YWCA 支援

ニュースレター Vol.27

2008年3月

発行: 日本 YWCA ビジョン 2015 委員会

〒102-0074 東京都千代田区九段南4-8-8

TEL: 03-3264-0663 FAX: 03-3264-0663

E-mail: office-japan@ywca.or.jp

最悪！

Rana Qumsiyeh *

2008年2月7日

占領下での生活をしていると、今が最悪だ、と常に思ってしまう。ところが時間が経つにつれ、そんな思いは全くの間違いであることに気づくのです。事態は更に悪くなり、想像よりもっともっと悪くなっていくのです！

“軍事検問所”になる前のかつてのチェック・ポイントでは、30分程度待たされて書類審査が終わると人々は通過でき、帰り道は審査を受けずに通ることができました。かつて最悪だったこの事態も、今となっては“ああ、古きよき時代よ！”と思うのです。

今週は、検問所を通過するのが本当に大変でした。検問所の次の扉へ進むのに最低1時間かかり、数百もの人々が列に並び、けんかと怒鳴り声・兵士の悪態にまみれ、つぶされ、立ち上がり、座り込み、中へ入り込むチャンスを待つのです。でも、今日は最悪でした。この先もっと悪くなることはもうわかっているのです。私は一週間で最悪の日ををよくよく考えながら言うようにしています。

太陽が照りつける中、検問所の中に入るためだけに30分待っていましたが、ついにあきらめました。扉は閉じたまま、誰も中へ入りも出て来もしないので、私たちは通りへ戻りました。噂によると、中で

急病人が出て(あんな人ごみなら当然!)救急車を呼んだとのことでした。15分ほど通りで待ったあと私たちは再度挑戦しましたが、開いた外門の中は相変わらず数百人が押し合いへし合いで列になっていました。

すると突然、ヘブライ語で「検問所閉鎖」という意味の"Ma'var Sagur"の音が、拡声器から流れました。ごく一部の人はがっかりして去っていましたが、私たちは粘りました。仕事や病院など、私たちが



にはエルサレムへ行く正当な理由があるからですが、それではなければ日々屈辱を受け、圧力をかけられてまで粘らないでしょう。兵士は拡声器の声を私たちが理解していないと思ったらしく、たどたどしいアラビア語で「検問所は開かない、家へ帰れ」と

言いましたが、私たちは残りました。

兵士たちが人々を中へ入れ始めるまでの 30 分は、気が遠くなるほどの長時間でした。心臓発作を起こした人が出て、その対応に兵士が戸惑っていました。(検問所を日々通過する人々は、当然、心臓発作を起こしやすくもなるでしょう)救急車を呼んだようでしたが、その前に急病人の指紋を採取して、テロリストではないかどうか本人確認したようでした。

朝 7 時 30 分から待っていた私は、9 時になって出発できました。そこにバスはなく、しばらく歩いてやっと乗ったバスは、エルサレムへ出発する前に定員の倍の人を乗せていました。それで終わりではありません！ 中間点のチェック・ポイントで再度 ID と許可証の検査をされました。私はなんとか 10 時の始業少し前に間に合いました！ 家から職場へのたった 8 マイル(12.8 キロメートル)の通勤のために、2 時間半が無駄になりました。

何が一番悲しいかと言うと、このことで苛々すらしなくなったことです。ただ疲れ果てました。エルサレムへ入ることをチェック・ポイントで初めて拒否されたとき、私は怒り、号泣し、叫び、移動する権利のために闘いました。今ではもう、どうでもいいです。抑圧が続くと、人はかつて人間としての尊厳を持っていたことを忘れるのかもしれない。精根尽きて、怒れるほどのエネルギーを集めることすらできなくなるのです。唯一わかるのは、この状況をもう続けられないということです。(翻訳:根岸朋子)

* パレスチナ YWCA プログラムコーディネーター

予防手段としての平和

バーナード・サベラ博士*

エルサレム、2008 年 1 月 29 日
パレスチナ とイスラエルの和平プロセス再開を模索する動きの中に、人々はそこにないものを読み取ろうとします。ある人々は、平和が無ければガザ地区やヨルダン川西岸地区にあらゆる狂信的な過激派集団が出現すると主張し、それゆえイスラエルも、パレスチナも、アメリカも、そして全世界が、未だエンジンがかかっていない平和という列車を

脱線させないために、できることを行うべきだと言います。このように、予防手段としての平和とは正義のためのものではなく、イスラエルによる占領を終わらせるためでも、パレスチナ人が当然の権利を行使するためのものでもありません。それは、文明社会を、さらには未開社会をも恐怖に陥れ、パレスチナ - イスラエル紛争をテロ行為の口実として悪用するすべての者への報復行為なのです。

また、現実の世界は別の一面も見せています。イスラエルは現在、おそらく非常に安全で経済的にも有利な立場にあり、平和はさし迫った課題ではありません。そして、アメリカのイスラエルへの経済的な介入がもはや重要ではないため、イスラエルにおける影響力の範囲は限定的なものとなっています。また、アメリカとイスラエルによる軍事戦略の影響力も、この関係が不可侵条約の一部であるがゆえに見過ごされています。いまやアメリカは、イスラエルの恵まれた状況を目の当たりにして、両国の神聖な関係をも軽視して、イスラエルの政治家の耳もとで優しい言葉をささやくだけの存在となっています。

この地域では、ヨルダン川西岸地区の 150 を超える非合法の入植地や前哨基地に 27 万人を超えるイスラエル人入植者が存在します。これには東エルサレムのアラブ人地区内やその周辺にある郊外の入植地に居住する 20 万人のイスラエル人は含まれていません。イスラエルの軍組織は一般市民を統制支配する能力に関しては、世界的にも最高の熟練度を持っています。これは、境界線の分離壁や多くの軍の検問所や路上防塞を建設するためのコンクリート、あるいはパレスチナ人を監視するためのシステム、つまりパレスチナ人の電話・自動車免許証・移動・その他イスラエルの防衛に極めて重要と思われる基本的情報を監視するスーパーコンピュータシステムなどに投入された、アメリカの莫大な資金の投入によって成し得たもので、他の地域でも模倣されています。

パレスチナ人は、法に触れることのない老母たちでさえ、イスラエルの軍当局からの許可が無ければヨルダン川西岸地区内での移動やイスラエル側への移動を自由にできません。軍当局が長期にわ

たる厳しいセキュリティチェックを要求するため、移動の許可を得るのは難しくなっています。ガザ地区は封鎖下にあります。ガザ地区とその住民を窒息状態に置くことを狙ったイスラエルのこの処置に対する国際的な非難の声が、燃料その他の必需品の供給の継続を約束させることに繋がっています。しかし、これらの約束は、ガザ地区北部から南部イスラエルに向けて旧式のカサムロケットがどれくらい発射されるかを問題視する政治的な状況に左右されます。ヨルダン川西岸地区はそれ自体、ガザ地区とともに、将来において、約束されたパレスチナ国家の舞台となる地域ですが、いまやスイスチーズ(穴あきチーズ)の穴のようにイスラエル人居住地が点在する地域になってしまっています。イスラエル人によって独占的に使用される入植地や道路ネットワーク、あるいは、イスラエル人入植者や検問所の存在が、町で暮らすパレスチナ人と、村に住むパレスチナ人の接触を物理的に不可能にしています。

政治家によって発せられる声明や、パリさながらの会議交渉にもかかわらず、イスラエルの手によって作り出された現状では、パレスチナ国家の活力とその経済活動を保護することはできません。たいていの西側諸国の政治家は、とりわけベラルな人であってもイスラエルに対しては弁解的な言い訳で終わってしまうのが常です。結局のところ、和平を進展させる鍵は、パレスチナとアラブの指導者たちの手にあるのです。パレスチナ人の和平への期待は本物で、心底から生じたものであって、その誠実さを証明するために精一杯行動していくことをイスラエル人、とりわけイスラエルのユダヤ人社会に納得させるために、政治指導者たちは最善を尽くすべきです。ボールを握っている立場にあるアラブ側がこのようにイスラエルを快く受け入れることを示すことが、イスラエルの内部に存在する勢力でパレスチナ人との和平を進展させたいと考えている人たちの立場を強めることになるでしょう。

アラブ側が和平を先導すること、あるいはアラブ側が和平のためにその被占領地を交換することは、国際法の原則に触れるため受け入れられないものです。東エルサレムを首都としてヨルダン川西

岸地区とガザ地区にパレスチナ国家を建設し、その国家がその地域を完全に掌握し、独立国家となることもまた、受け入れられることではありません。真の和平が実現するとしたら、イスラエルが作り出したこの既成事実はどうなるのでしょうか。保守派の入植者が居住している地域からイスラエル側の撤退が必要になるのでしょうか。また、ヨルダン川西岸地区からの撤退は国家に対する重大な反逆行為であると信じている、保守派の政治的圧力にイスラエルはどう対処するのでしょうか。今では、パレスチナ - イスラエル間の和平は、国連の決議や第4回ジュネーブ会議のような国際的な調停によるべきだと真剣に考える人はいません。その一方で、和平に向けた活動の展開を可能にするロードマップ(行程表)は、イスラエルによって生み出し続けられる過酷な現実によって、ずたずたに切り裂かれているのです。圧倒的多数のパレスチナ人によれば、行く手にある近未来に、ロード(道路)もマップ(地図)も存在してはいません。

最後に、「予防手段としての平和」をただ唱える以外に何かを提起する必要があります。「予防手段としての平和」の主張に従って、悪しきアル・カイダや他の過激派集団がイスラエルに取って代わるのを防ぐために和解する。いや、この主張は順序を逆さまにすべきです。和平を成し遂げようとするすべての人々にとって、それが極めて重要であるからこそ和解するのです。パレスチナ人たちは、長らくその公正と正義を否定されてきました。恐ろしいほどの人権侵害を日常的に受けています。占領下にあるこの状態は、パレスチナ人全体を窒息死させてしまいます。パレスチナ人の政治的権利は踏みにじられ、政治運動は制限され、経済は不安定で、しかも社会はあらゆる形態の被害をこうむっています。パレスチナ人とその社会に貧困をもたらし、パレスチナ人の基本的な政治上の権利やその他の権利を否定するというイスラエルによる占領の実態は、イスラエルにとっては当然であっても、結局のところその道徳観や倫理観、そして自衛権や安全保障を正当化することはできないでしょう。

(翻訳協力: 後藤幸男)

*バーナード・サベラ博士 (Dr. Bernard Sabella)
中東エルサレム教会評議会パレスチナ難民支援局実行委

オリーブの木植樹ツアー 2008 (抜粋版)

2008年2月3日

ノルウェー、イギリス、そしてアメリカからの25人の参加者が、Beit Sahour に到着し、みんなで夕食を取った後、プログラム・コーディネーターの Baha Hilo さんが、これから10日間のプログラムについて簡単な説明をしてくださいました。

Beit Sahour の町にある教会で日曜礼拝をし、Dar Annadwa にあるベツレヘム国際センターでパレスチナのお祭りの食事をいただいた後、一行は Aida 難民キャンプに向かいました。



Aida 難民キャンプ:

難民キャンプは、地域の分断をまざまざと見せ付ける“分離壁”のすぐそばにあります。1948年からの難民キャンプの歴史と、保健・教育・食糧援助などの国連が果たした役割について説明を受けたあと、キャンプを訪問しました。そこに住む子どもたちに囲まれながら、一部とは言え私たちはキャンプの様子を見ることができ、この状況へのさまざまな質問についても回答を得ました。

2008年2月4日

Al-Walaja の畑に到着:

私たちは、Al-Walajah に向かい、畑に320のオリーブの木を植えるためにオリーブ農家の Abdil Fatah さんに会いました。まず、苗木を集め、植え始めてからわずか15分後、イスラエルの兵士たちが現われてしばらくその存在を誇示し、何を言うでもなく去って行きました。私たちの今日の目的は、2箇所の違う畑に木を植えることで、1つ目が終わると Fatah さんが所有するもう1つの畑に向かいまし

た。

Fatah さんは土地を没収されないように、最近この畑に小さな家を建てたそうです。

兵士によるハラスメント:

Fattah さんによると、兵士たちはとても頻りにやって来て、彼を畑から追い出そうと攻撃してくるそうです。そして、兵士は畑の中に建てた小屋のいくつかも破壊しましたが、Fattah さんはこの土地を諦めませんでした。Fattah さんは、ただ平和に生活できることを願っています。

2008年2月5日

ICAHD プレゼンテーションとツアー:

5日の午後、私たちは Israeli Committee against House Demolitions (ICAHD = 家屋破壊に反対するイスラエル評議会) を訪問し、その活動を紹介してもらったあと ICAHD の職員に東エルサレムとイスラエルの入植地を案内してもらいました。

最初の訪問地は、ヨルダン川西岸地区で最も大きな植民地の一つ、Ma'ale Adummim でした。ここは1970年代後半につくられはじめ、依然、オスロ協定(ノルウェー、1993年)とアナポリス会議(米国、2007年)により建設中です。



写真 / 1982年、違法に建設された入植地の拡張により、かつて農民が家屋の没収と退去にあった、Al-Khader 村を訪問。この地区にオリーブの木を植樹する。

この訪問によって、私たちは、土地の没収や家屋破壊、不安定な開発、そして経済状況と分離壁の影響についてより多くの情報と事実を得ることができました。

参加者の声:

この旅は参加者の多くにとって、エルサレムとヨルダン川西岸地区をとりまく現状について知る、よい経験になりました。中でも大きな衝撃だったのは、不動産をめぐる権利は、結局その居住地が問題なのではなく、イスラエル人であるかパレスチナ人であるかによって大きく違ってくるということでした。

(翻訳協力: 鈴木美千代)



パレスチナYWCAからの

緊急行動の呼びかけ

(2008年3月5日)

**ガザの子どもたちの虐殺を止めるため、
声を上げよう**

イスラエルの占領と戦争犯罪を終わらせるために

2008年2月27日以降、イスラエル占領軍は陸・海・空からガザを攻撃しています。今日までに28人の子どもを含む116人の市民が殺害され、350人以上の負傷者が出ています。

1967年以来、イスラエルはヨルダン川西岸地区とガザを占領し、パレスチナの人々の生活を地獄の経験へと変えていきました。以降、女性や子どもを含む65万以上のパレスチナ人が政治的に投獄され、数万人が死傷し障がいを負われています。1万8千軒の家が破壊され、その家族はホームレスと化しています。イスラエルは休むことなく(パレスチナの)全住民に苦痛を与え、検問所を作り、巨大

で頑丈な壁を作ってパレスチナの地を脅かし、数千ものパレスチナ人がその土地・学校・保健サービス・水・宗教施設を利用すること、そして離れた場所に住む家族と会うことを阻んでいます。パレスチナ人の一挙一動を管理するため、人種差別主義に裏打ちされた、精巧な通行許可のシステムが導入されています。2007年1月21日以降、総人口150万人のガザはイスラエルの包囲下に置かれ、電気もない暗闇で人々は暮らしています。さらにこの包囲は、生活燃料と食糧、医療・医薬品の深刻な削減を導きました。この悲惨な人道状況は、軍によるガザの猛攻撃でさらに悪化しており、この間にも失われている人々の生命を助けるため、第三者の早急な介入が必要です。

パレスチナの全ての人々、そして中東地域の人々を脅かしている事実が明らかにされるのを見て、世界は黙っていることはできないでしょう。イスラエルの行為は、基本的人権と人道法に明らかに違反しており、国際社会によってその説明責任を問われなければなりません。

パレスチナYWCAは、世界のYWCA・人道団体・人権団体、そして市民社会がただちにこの事態に介入し、イスラエルがガザと占領する全ての地域への攻撃を止めること、そして市民の虐殺と家屋・土地の破壊を完全に止めるよう働きかけることを広く呼びかけます。そして会員をはじめ広く一般へ、この非人道的な事態と戦争犯罪を中東問題の根本的な原因を踏まえ教育を通して伝えること、各国政府や政治機関へ働きかけることを通して問題を摘発することを呼びかけます。

国際連合がその設立の基礎となる原則を支持し、実行されないまま山積みになっている数々の決議を尊重することに期待し、譲ることのできないパレスチナ人の人権の尊重と、イスラエルによるパレスチナとアラブの地の占領を終わらせることを最重要事項にすることを、私たちはここに訴えます。

- 1- ガザおよびヨルダン川西岸地区の罪のない市民の虐殺と、問題を抱えるガザの不正な包囲をただちに止めること。
- 2- ガザ市民を保護すること。

- 3- イスラエルの政治指導者をハーグ国際司法裁判所へ出廷させ、戦争犯罪について裁くこと。
- 4- 政府や政治機関へ働きかけ、イスラエルによる基本的人権の侵害を制裁すること。
- 5- 人道的被害と継続する戦争犯罪について、中東問題の根本的原因とあわせて、教育を通して一般へ広く伝えること。

手遅れになる前に、罪のないガザの人々の生命を救おう



© Kimiko TERASHIMA

オリーブの目・芽・Me

子どもたちの笑顔

人間はみな、一人ひとつずつ「愛情袋」というものを備え持って生まれてくるそうだ。親や周りの大人たちから、まあくて、あたたかい「愛情玉」というやさしい玉をたくさん入れてもらうことで愛情袋をいっぱいにしてゆく。そうして子どもたちは愛を知り、また自分からも誰かに愛情玉を分けてあげたくなるのだ。

パレスチナには、目の前で撃たれて死んでいく人や、自分の家がイスラエル軍に破壊されるのを目の当たりにしたことがある子どもは、少なくないだろう。心理的ストレスにより、うまく喋れない、声を発することができないといった問題を抱えている子どもも少なくないようだ。理不尽な大人達により、彼らの愛情袋はズタズタに切り裂かれ、機能しないまでにさせられている。

ヨルダン川西岸のベッサフルには、トラウマを持つ子どもたちの治療と教育を専門とし、1996年に創立された学校、ホーリー・チャイルド・プログラム(HCP)がある。これは、パレスチナ教育省にも登録された学校施設だ。HCPは子どもたちが地域の学校に戻るための通過施設の役割を持ち、基本的には1年単位で子どもを受け入れ、子どもの症状によるが2~3年でHCPを終了することが多い。校長先生のシスター・ローズはアメリカ人で、パレスチナで20年以上働いている心理学の専門家である。「トラウマの治療はトラウマの原因を取り除くことなのに、子どもたちは紛争が続く占領下のパレスチナに暮らすことそのものがトラウマになっている」と、子どもたちの置かれた困難な状況を指摘している。自分の生まれた地に暮らすこと自体がトラウマという状況を果たして私たちは想像できるだろうか。考えれば考えるほど、私は悲しくなってくる。

子どもたちが少しでも自分たちの住む場所が好きになり、誇りが持てるようにと、HCPではパレスチナの自然・文化・伝統等をふんだんに取り入れて教育を行っている。

傷つけられた愛情袋が少しずつそして1日でも早く癒え、いつかまあくてあたたかい愛情玉を、民族を超えて分けてあげられる、そんな人に成長して欲しいと心から願う。

(名古屋YWCA「オリーブの樹」メンバー
加藤千晶)

参考URL : http://www.ngo-jvc.net/php/jvcphp_epdisp.php?

ThreadName=p01&ArticleNo=140

オリーブの木キャンペーン

1口3000円でオリーブの木1本を贈ることができます。
* 寄付者には証明書が発行され、植樹された場所にはプレートに寄付者の名前が刻まれます。

< 振込先 >

(郵便振替) 日本キリスト教女子青年会

口座番号: 00170 - 7 - 23723

* 通信欄に「オリーブの木」とご記入ください。

* パレスチナYWCAによる証明書発行のため、振替用紙にお名前のふりがなまたはローマ字表記を必ずご記入ください。